青が消える　　村上春樹

教材のねらい

1　選定の理由

「青が消える」は、世界がミレニアムを迎えるというお祭り騒ぎの中で、主人公が襲われる喪失感と孤独感を端的にまとめている好短編である。周囲から青が消えるという出来事は一見突飛ではあるものの、それを除けば現代とほぼ変わらぬ社会状況を背景としている。執筆時期は一九九〇年代初頭だが、生徒たちにとっても想像力を働かせやすい舞台設定であろう。主人公の心情を描写する際の独特な比喩表現が効果をあげており、あっさりとした印象の中にも極めて寓意性の高い、すぐれた虚構作品となっている。

まずは「僕」という一人称で記述される主人公の心境を探っていくことが必要であるが、この作業は同時に、他の人物の言動を丁寧におさえていくことにもつながっていくはずである。したがって、第一に、主人公の言動の意味と、周囲の人物・状況との落差を読解し、第二に、比喩を中心とする表現・描写のあり方を読解することが課題であろう。そこから、人間を、その周囲の状況との関連の中で捉えていく視点を学んでいくことができるだろう。また、主人公の心情の中に生徒自身の経験をどう関連づけていくかが大切であり、さらに大きな社会的文脈へと広げ、少数者の価値観がかき消されていく悲哀の寓意と捉えることで、興味深い指導ができうる教材であると考え選定した。

2　指導のねらい

小説が虚構世界であると意識させる設定と展開であるため、初読の際には生徒たちの間にややとまどいがあるかもしれない。しかし、主人公の青をめぐる大切な記憶が別れた彼女とつながっていたことは、その青が世界全体から喪失していく中、主人公以外が関心を示さないという状況を理解する糸口となる。虚構の中に自身の真実、そして社会のしくみへの違和感を発見していくという作品に寄り添った読解を経験できるよう導いていきたい。

(1) 主人公の置かれている状況設定を細かく確認する。
(2) 「青」と「白」をめぐる比喩表現の象徴性を理解していく。
(3) 他の人物の言動とその意味から、主人公の喪失感と孤独感の深まりを考える。
(4) 全体の寓意性について、個人と社会の両面から話し合う。

3　評価規準

(1) 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。〔知・技〕(1)ア
(2) 常用漢字の読みに慣れ、主な常用漢字を書き、文や文章の中で使っている。〔知・技〕(1)イ
(3) 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。〔知・技〕(1)ウ
(4) 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。〔知・技〕(1)エ
(5) 我が国の言語文化の特質について理解している。〔知・技〕(2)ア
(6) 「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。〔思・判・表〕B(1)ア
(7) 「読むこと」において、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。〔思・判・表〕B(1)イ
(8) 「読むこと」において、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価している。〔思・判・表〕B(1)ウ
(9) 「読むこと」において、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。〔思・判・表〕B(1)エ
(10) 進んで作品に表れているものの見方・感じ方・考え方をつかみ、現代の社会・文化について批評する能力を身につけようとし、学習課題に沿って、舞台設定や、比喩や象徴の意味を理解しようとしている。〔主体的に学習に取り組む態度〕

指導計画案

展開	導入	展開
指導上の重点目標	1 小説の特徴を理解させる。 2 作者について知らせる。 3 作品全体を把握させる。 4 背景となっている時代状況について理解させる。	1 全体を場面展開によって四段落に分けさせる。 2 第一段落の内容を、「僕」の言動を押さえながらつかませる。 3 「僕」と別れたガールフレンドとの関係を把握し、「僕」の心情を考えさせる。
学習活動	① 今までに読んだ小説と比べてどういう特徴があるかあげる。 知技 ② 村上春樹の作品の読書経験を聞き、感想をあげる。 ③ 全体を通読して場面や状況を確認し、場面展開を理解する。 知技・思判表 ④ 設定や他の人物の言動から作品の背景にある時代状況を理解する。 思判表	① 〈第一段〉（初め～二三六・15） 「僕」の行動が徐々に広がっていくさまを段落の区切りとして考える。 思判表 ② 自分の部屋の中で「僕」がどういう状況に陥ったか、また、その時の「僕」の心理はどういう状況かつかまえる。 思判表 〈第二段〉（二三六・16～二三八・7） ① 「僕」への対応から見える「彼女」の心情を考える。 ② 彼女が電話で言ったことから、「僕」をどのように見ているか読み取る。 ③ 彼女の言葉を「僕」がどう受け止めたか考える。 思判表
指導上の留意点	① 第一印象をあげさせて、この作品の特徴を押さえさせる。唐突な舞台設定に着目させながら、作品の寓意性に目を向けるように促してみたい。 ② 村上作品の読書経験があるものに感想を求めて、作者を簡潔に紹介する。 ③ 語句の意味を確認しながら特徴的な表現を押さえ、場面展開を幾つかに分けさせる。主人公の行動やその理由を押さえることによって四段構成と考えられよう。 ④ ミレニアムという舞台設定や他の人物の言動等から、作品の背景にある時代状況を理解させる。生徒にとってミレニアムは過去の出来事であるが、現代とほぼ変わらぬ社会状況を背景としていることを理解させる。	① 「僕」の行動が自室から徐々に外部へと広がっていく点に注意して、場面展開のあり方を理解させる。青が消えた状況を比喩を多用して表現している点を押さえながら、「僕」の状況、青が消えていく様子、それに対する「僕」の行動を確認させる。 ② 「青が消える」という状況に突然なったときどうするかという発問を中心に、「僕」にかかわる表現を押さえながら「僕」の状況を理解させる。同時に、なぜミレニアムを迎える夜に一人でアイロンをかけているのか、なぜパーティーにでかける気にならなかったのか発問しながら、「僕」を規定していた心理状況も押さえさせる。 ① 彼女の現在の生活のあり方を想像させる。電話の向こうの彼女の部屋では、賑やかなパーティーの真っ最中である。彼女は「僕」のことなど忘れたように楽しんでいる様子で、青が消えていないかどうかを尋ねるのは場違いであることを理解させる。 ② 会話の表現に注意させて、別れた彼氏である「僕」を、現在の彼女はどう見ているか考えさせる。ここでは「僕」は（他の人から）どういう人間に見られているのか」が大事なので、彼女の真意についてまで踏み込む必要はないだろう。 ③ 彼女に言われて「僕」はどういう気持ちになったのか意見をあげさせる。「僕」に近しい存在であった彼女でも青の消滅を気にもとめていないこと、新しい生活を楽しんでいることが、「僕」の孤立感を際立たせている点に注意させる。

展開		
展開	指導上の重点目標	学習活動
	4 地下鉄の駅員の言動に注意して、ここでの政治の意味について考えさせる。 5 「僕」がひとりで心配していることについて、具体的に考えさせる。	①〈第三段〉（二三八・8～二四〇・3）駅員の返答からどういう社会が読み取れるか考える。 ②「僕」は何について違和感を覚えているのか、それが新しい世紀に入ることとどうかかわりがあるのか考える。思判表
	6 コンピューターがいう歴史の意味を捉えさせる。同様にここでの経済とはどういう意味か考えさせる。 7 なぜ「僕」は小さな声で言うのか考えさせる。 8	①〈第四段〉（二四〇・4～終わり）「かたちあるものは必ずなくなる」「それが歴史」だとは具体的にどういうことなのか、自分の経験から考える。思判表 ②ここでいう歴史の考えと結びついたかたちで経済も意味づけられている。進歩発展がすべてに優先するとどういう社会になり、そこでの人間はどうなるか想像する。思判表 ③青の消滅について尋ねたすべての人に冷たくあしらわれた「僕」の心情を考える。「僕」は何にこだわっているのか考える。思判表

展開	
展開	指導上の留意点
	①駅員の会話はＳＦ的な近未来社会を思わせるが、ここでの政治のあり方を考えさせる。駅員の反応はいろいろな解釈ができようが、この駅員が属する組織は完全な上意下達式で意思決定がなされていること、そして「僕」が住む社会が近未来的な中央集権体制であることに注意させる。 ②「僕」の孤独がますます強められ、その疎外感から、新しいこと、未来から目を背けている心理状態になっている点を理解する。他に青を探そうとするが、時計は午後十一時四十五分を指している。新しいミレニアムを祝う人々の歓喜の高まりと正反対の気分にのめり込んでいく「僕」の心理状況に注意させる。
	①生徒自身の経験を想起させ、身の回りからなくなったものとその代わりにできたものを具体例としてあげさせる。これまであったものが新たなものに乗り換えられることは、社会のどの分野でも見られることである。こうした変化を「進化」「進歩」と捉えて疑わない習性が身についていないかどうか考えさせる。 ②新しさがすべてに優先するとどういう世の中になるのか、それだけで人間は生きていけるのか、現在の状況を考えさせる。前項から一歩前進し、物事が新しくなる裏で多くのものが捨てられ、忘れられていくが、それが人間にどういうものの見方を植えつけることになるか考えさせる。進歩発展が歴史であり、経済の原動力だというコンピューターの回答を批評的にとらえさせる。携帯電話やパソコン、あるいは高度経済成長期やバブル経済全盛期の日本社会などの例から考えさせてもよい。 ③ここでの「僕」は周囲の者とは違って、どういうことを訴えようとしているのかを考えさせる。皆が未来への期待でいっぱいになっている状況の中で、「僕」はひとり青の消滅について思い悩む。また、他の人物との対応などから、「僕」の暮らしている社会全体の仕組みが見えてくる。そこでの「僕」のこだわりとはどういうことか、最後の「僕」の小声の反論を踏まえて考えさせる。

まとめと発展		
1	2	
主題について話し合わせる。 読書活動への発展をはかる。		
①	②	
この作品で「僕」が訴えていること、好きな色だったという気持ちを持ち続けるということは、どういうことかを考える。また、１９９９年大晦日の設定にはどんな意味があるか考える。**主態**	作者と作品について整理し、代表作を押さえておく。「言葉と表現」１～３について調べる。**知技・思判表**	
①	②	
作品全体の寓意性について、個人と社会の両面から話し合わせる。何かが好き、愛着があるということは、そのものの変化や喪失を拒む心理とも言える。それは、本文で言われている歴史や経済の概念とは対立する心情でもあろう。また、本作品が１９９９年の大晦日の夜に設定されているのは、それが最も人々の目が未来に向いている時であるからと考えられるだろう。周囲が日進月歩で変化していく時代状況にあって、新しければよいのかどうか、具体的に考えさせる。	「作者」及び「参考文献」の項参照。幾つかの作品の特徴などをあげておく。読書指導としては、代表作だけでなく、エッセーや紀行、翻訳なども併せて勧めたい。また、「言葉と表現」を調べながら、本作品の比喩や独特な描写などをあげさせて、その効果について話し合わせる。	

作者

村上春樹

昭和二十四（一九四九）年一月十二日～。小説家・米文学翻訳家。京都府京都市伏見に生まれる。両親は国語教師であった。昭和三十六（一九六一）年に兵庫県芦屋市に転居、芦屋市立精道中学校時代に世界文学全集に親しみ、ジャズ音楽に傾倒する。三十九（一九六四）年兵庫県立神戸高等学校へ入学。新聞部に入部し編集長を務めた。このころアメリカの現代小説を原文で読み始める。なかでもチャンドラー、ヴォネガット、フィッツジェラルドなどを耽読した。四十三（一九六八）年早稲田大学第一文学部演劇学科入学。上京し、文京区内の大規模な個人経営の男子学生寮（和敬塾）へ入った。大学は学園紛争の毎日であったが、学生運動とは距離を置いていたようである。映画とジャズに明け暮れる学生生活であった。このときの体験は長編「ノルウェイの森」（昭六十二）に生かされている。四十六（一九七一）年妻である陽子夫人と学生結婚し、四十九（一九七四）年には在学中でありながら国分寺にジャズ喫茶「ピーター・キャット」を開店し、経営する。五十（一九七五）年卒業論文「アメリカ映画における旅の思想」を書き七年間在籍した大学を卒業した。「風の歌を聴け」（昭五十四）で第二十二回群像新人文学賞受賞。五十六（一九八一）年には、作家として生活していくことを決意し、ジャズ喫茶を廃業した。以後、意欲的に作品を発表していくが、執筆に集中するため六十一（一九八六）年に日本を出て、ギリシャとイタリアに住む。六十二（一九八七）年「ノルウェイの森」が刊行され大ベストセラーになり、これをきっかけに村上春樹ブームが起きる。平成三（一九九一）年プリンストン大学の客員研究員として招聘され渡米する（七年帰国）。九（一九九七）年地下鉄サリン事件の被害者のインタビューをまとめたノンフィクション「アンダーグラウンド」、十二（二〇〇〇）年阪神・淡路大震災をテーマにした連作集「神の子どもたちはみな踊る」を刊行する。日本国外でも評価が高く、十八（二〇〇六）年にフランツ・カフカ賞を受賞し、二十（二〇〇八）年にプリンストン大学より名誉学位（文学博士号）を授与される。二十一（二〇〇九）年エルサレムで行われた授賞式に出席し、ガザ侵攻を批判した記念講演を行う。フィッツジェラルド、サリンジャーなどの作品を翻訳し、随筆、紀行、ノンフィクション等も数多く刊行している。令和三（二〇二一）年早稲田大学キャンパスに「村上春樹ライブラリー」が開館した。

文学活動

主要な小説としては、「羊をめぐる冒険」（昭五十七）野間文芸新人賞受賞、「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」（昭六十）谷崎潤一郎賞受賞、「ノルウェイの森」（昭六十二）、「ダンス・ダンス・ダンス」（昭六十三）、「ねじまき鳥クロニクル」1～3（平八～九）読売文学賞、「スプートニクの恋人」（平成十一）、「海辺のカフカ」（平十四）、「1Q84」1～3（平二十一～二）、「色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年」（平二十五）、「騎士団長殺し」（平二十九）などがある。

レイモンド・カーヴァーなど翻訳も精力的に行い、主要なものとして、サリンジャー「キャッチャー・イン・ザ・ライ」（平十五）、フィッツジェラルド「グレート・ギャツビー」（平十八）、カポー

ティ「ティファニーで朝食を」（平二十）などがある。また、紀行、エッセイ、写真集、絵本、対談集など多数の著作がある。

作者を解くカギ

村上春樹の世界は、小説ばかりでなく、翻訳、紀行、エッセイ、写真集、絵本など多様なジャンルに渡り、かつまた、初期小説で特徴的な固有名詞の多さ、特に音楽、映画をはじめとして登場人物のライフスタイルに至るまでかなりな複雑さを見せる。しかし、一見すると多彩な姿を見せているようだが、その実、現代作家としてはめずらしく愚直な物書きという印象も捨てきれず、一昔前の「文士」と言われた作家たちの姿勢にも通じるものがありそうである。

村上春樹を解くカギとして注目したいのは、ドライな人間関係をクールに生きる登場人物のスタイルと、それとは対照的に恋愛に悩み、人間に苦悩する登場人物の共存だろう。そして、それらの対照的な人物関係を基底にしながら、小説作品は一貫して、他者との交流、コミュニケーションの不在をめぐって強いイメージを打ち出してきているように思われる。まず、第一のカギはコミュニケーションの希求と言えよう。

第二のカギは、パラレルな視点を小説内に設定し、それによって特権的な視点を消し去ろうとする傾向とでも言えようか。それが最も先鋭的なかたちで提出されたのは、「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」で、主人公の異なる小説が、一章ごとに交代に進行していくものであった。「海辺のカフカ」などでも同様の手法が用いられており、他にも「私たち」という一人称複数形でカメラのような視点が登場する「アフターダーク」（平十六）などがある。

また、カギとまで言えないが、村上作品には多くの固有名詞が氾濫する。特に音楽に関しては、ジャズに限らず一九五〇年代～七〇年代のポップミュージックやロックも含めて、執拗なほど多用している。執拗に反復される曲などはあらためて読者としても音源を聞いてみてなにか納得するようなところもあり、村上春樹作品の音楽使用に関しては一考の余地がありそうである。小説内に飲食するシーンがよく出てくるのも特徴的であり、ある特定の年代層の青春時代がそのまま再現されているようなイメージも強い。

文章の特徴として、かなり即物的な面が強く、非常に視覚的な印象がある。あるシーンが先行してイメージを構成し、そのフレームに沿って言葉が当てはめられていくといった感じを持つことが多い。確かに比喩表現も多用されるが、ページごとにそれぞれの場面が映像的に進行していくように思われるのである。おそらくこの辺に多くの読者を得ている秘密があるのではないか。いわば映画を観ているように読める小説と言えるだろう。しかし、そのテーマはかなり難解であり、単純な物語のように読むこともできる一方で、多くの問題を読者へ投げかけている作品が多い。

出典

本文は「村上春樹全作品」1（講談社　平成十四）によった。初出は原題 Losing Blue としてフランスのル・モンド紙（一九九二年）に発表されたものである。

出典との異同

教科書表記の統一による変更のほか、〔　〕内の理由により、次の通り改めた。

○「青が消える（Losing Blue）」→「青が消える」（原文P二七五、教科書P二七四）〔教育上の配慮〕

○会話文の最後の句点は、原文どおり省略」（全体）〔著者の希望による〕

○「NEC」→「N社」（原文P二八一・13、教科書P二四〇・7）〔教育上の配慮〕

参考文献

＊教師用

「村上春樹イエローページ」加藤典洋　荒地出版社　平八

＊代表的な長編小説の作品案内や解説など。

「村上春樹スタディーズ05」栗坪良樹・柘植光彦編　若草書房　平十一

＊作品論や作家論だけでなく、作者の年譜や文献総覧が充実している。

「村上春樹作品研究事典」村上春樹研究会編　鼎書店　平十三

＊二〇〇〇年までの全作品の解説や読みのポイントなどが示してある。

＊生徒用

「風の歌を聴け」村上春樹　講談社　昭五十七

＊小説家であるらしい「僕」が二十代最後の年を迎えて「自己療養へのささやかな試み」として自らの青春時代を語ろうとして始まる話。大学の夏休み中に港町に帰省した「僕」は「鼠」と呼ぶ友人とビールを飲んでは語り合う。そして、自らこれまでに関係した三人の女の子の話を語っていく。恋愛・性・友人・社会との関係と自分の生き方への不安と自信、あるいは諦めのような姿勢などが交錯した青春をクールに描き出す。

「ノルウェイの森」上・下　村上春樹　講談社　平三

＊神戸での高校時代、「僕」（ワタナベトオル）と、親友キズキとその恋人直子の三人は常にいっしょに行動していたが、大学進学目前にキズキは自殺した。「僕」は直子を残したまま東京の大学へ進学し、ある私設の学生寮で暮らし始める。寮生活で知り合った年上の永沢さんは東大生で外交官を目指すエリートだが、彼に誘われるままガールハントに明け暮れるような日々を過ごしていた「僕」の前に、東京の女子大に進学していた直子が、心の病を抱えたまま現れる。その後、直子は関西の山奥にある療養施設で暮らすようになり、「僕」は大学で知った緑とも付き合いつつ直子との関係も続けていく。死を意識した

まま生のまっただ中にある「僕」の葛藤と、恋愛に関わる苦悩を描き、小説家村上春樹を強く印象づけた長編小説である。

「やがて哀しき外国語」村上春樹　講談社　平六

＊「青が消える」執筆時のアメリカ社会の変動や、「よそ者」として外国で暮らす自己や言語について述べたエッセー。

「キャッチャー・イン・ザ・ライ」

J・D・サリンジャー、村上春樹訳　白水社　平十五

＊主人公のホールデン・コールフィールドによる口語的な一人称の語りが特徴。大人や社会の欺瞞や建前を「インチキ」として拒否する青春小説の古典的名作。

「一九八四年」ジョージ・オーウェル、高橋和久訳　早川書房　平二十一

＊一九四九年に発表された近未来ＳＦ小説。一九八四年、人々はビッグ・ブラザーと呼ばれる独裁者に支配され、息苦しい管理社会の中で暮らしている。全体主義国家によって分割統治された世界の恐怖を描いている。

主題

古いものや些細なものが捨てられ、すべてのものが進歩し、新しくなることが人間にとって常に良いこととは限らない。失ってからはじめて気づくようなものの中にこそ、かけがえのない、自分自身を確認する契機がある。

「青が消える」は虚構の要素の強い作品ではあるが、「僕」の心情と行為を丹念に追跡していくと、読者自身にとっての「青」は何かという問いが立ち現れてくる。

時代が変わることで失われていくものが自分にとってかけがえのないものであったとき、あるいは、目の前にある現実や社会というものが制度として立ち塞がったとき、「個」としてのあり方や「生」の実相というものが立ち現れてくるといえよう。

構成

P二四一・11から最後までを独立させて五段落構成としてもよいだろう。

段落	ページ・行	段意
第一段	初め～P二三六・15〈そして青が消えたのだ。〉	１９９９年の大晦日の夜、アイロンをかけているときに、青が消えた。最初は自分の目のせいかと思ったが、何度見直しても青は存在しなかった。青色だった衣類はすべて白に変わっていた。ガールフレンドとのハワイ旅行の写真の青い海も、シベリアの氷原のような白い広野に変わっていた。世界中の人間がミレニアムを祝うパーティーにでかけていたが、「僕」はガールフレンドと喧嘩別れして、ものすごく落ち込んでいたところだった。
第二段	P二三六・16〈僕は青の消滅について何か情報が〉～P二三八・7〈そして彼女は電話を切った。〉	「僕」は青の消滅について情報を得るために、何人かの友人に電話をかけるが、誰もつかまらない。最後に、別れたガールフレンドに電話をかけるが、相手は賑やかなパーティーの最中だった。「僕」は電話に出てきた彼女に青のことを尋ねるが、青のことなどどうでもよいし、そんなことで他人の楽しみに水をさすなとまで言われ、実に冷たい対応をされる。
第三段	P二三八・8〈僕はコートを着込み、外に出てみた〉～P二四〇・3〈よくないことが起こるんじゃないかという気がしたのだ。〉	電話で情報が得られなかった「僕」は、外へ出て自分の目で確認しようと行動を起こす。ブルーを基調色としていた地下鉄も、すべて白に変わっていた。駅員に尋ねても、駅員は青を「政治のこと」と言うなど、要領を得ない。「僕」は別の青を探そうと、青が印象的ないくつかのものを想起するが、どこにも見いだせないままでいる。そして、このまま新しいミレニアムに入ってしまったらよくないことが起こるのではないかという気になり、不安が募ってくる。
第四段	P二四〇・4〈僕はクレジット・カードを使って〉～終わり	「僕」は電話でコンピューター・システムの総理大臣に青の消滅を訴えるが、総理大臣は、青は美しい色だが、形のあるものは必ずなくなるのが歴史であり、なくなったらまた新しいものを作るのが経済である、と答える。「僕」がわけのわからないまま通りを歩いていると、時計が十二時を打ち、みんなが一斉に歓声をあげ、ミレニアムを迎えた。誰も消えた青のことなど気にしていなかったが、「僕」だけは、好きな色だった青が消えたことの喪失感を覚えていた。

板書例

1　第一段〈行為・展開〉

アイロンがけの最中にシャツの青が消えた
　…視力がどうかしてしまったのか
明るい部屋に移動してよく見てみた
　…変化なし・「とりとめのない白」
寝室のクローゼットの中を見てみる
　…青いものはすべて「歳月に洗われた見知らぬ人の骨のような白」に変わっていた。
（ガールフレンドと行った）ハワイ旅行のアルバムを出して見た
　…青い海は「シベリアの氷原のような茫漠とした白い広野だった」

青が消えたあとの白は空虚で、よそよそしい印象

その時の「僕」の状況を整理すると
〈時間〉一九九九年一二月三一日（大晦日）の夜
〈場所〉僕の自宅
〈状況〉
・僕は少し前にガールフレンド（恋人?）とけんか別れをして、ものすごく落ち込んでいた。
・新ミレニアムを祝うパーティーで浮かれ騒ぐ世界中の人間
◎僕の印象↓「くだらない」…そこで、ひとりで家に閉じこもってアイロンをかけていた。そして青が消えた。

2　第四段〈行為・展開〉

・電話で総理大臣（中央コンピューター・システムによる合成・バーチャルな総理大臣）を呼び出してたずねた。
・総理大臣「青はまことに美しい色であります」
　↓牧水の短歌が好き・美しい短歌と答える。
＊若山牧水の短歌「白鳥は哀しからずや」↓白鳥は哀しいのか?
　「空の青、海のあをにも染まずただよふ」
　↓白いのは自分だけ・孤独?それとも孤高?
・僕「青がなくなってしまったんですよ」と怒鳴った
・総理大臣「かたちあるものは必ずなくなる」と言い聞かせるように僕に言った
　「好き嫌いに関係なく歴史は進む」
　「何かがひとつなくなったら、また新しいものをひとつ作ればいい」
　「その方が経済的」
・僕はわけがわからないままどこまでも歩き続ける
　↓納得できないが反論もできない
・みんなが歓声をあげる・新年になり新しいミレニアムがやってきた・誰も消えた青のことなんか気にしていない
でも青がないんだ、と僕は小さな声で言った。
そしてそれは僕が好きな色だったのだ↓ゴチック体で強調・断定
＊僕と周囲の人々との対照性はいっそう明確になりつつ終了する。
＊僕が強く訴えたいことは何だったのか。

発問例

・「導入の問い」のねらい

消えてしまったら困るものは何ですか。

（ねらい）生徒によって答えはまちまちだと思うが、具体例を挙げさせた上で、自分以外の誰が困るのかという視点で分類していくと、導入になるのではないだろうか。自然であれば全生物が困るだろうし、国家や社会制度であれば、その制度の中で暮らしている人々ということになるだろう。学校、家族と、自分を含むサークルをどんどん狭めていくと、最後には、他の人はそれが消えても困らないけれど、自分自身はかなり困るものが残るだろう。価値観を共有していない人々に対して、自分にとって大事なものの存在価値を、私たちは説明することができるのだろうか。そうした対話が困難な時に感じるであろう孤独に思いをめぐらすきっかけとしたい。

●二三四ページ

問 **「青が消えた」（1行目）ときの描写から、「僕」のどのような様子が読み取れるか。**

答 唐突な出来事に、とまどう様子。

補 バッテリーあがりやオーケストラの中断という比喩表現から、「青が消えた」ことが唐突さや意外性を感じさせるような現象として強調されていることに着目する。

問 **「居心地の悪い沈黙」（5行目）とは、どういうことか。**

答 してはならないことやあってはならないことが出現したような、その場での片付けようのない違和感が漂っているような感覚。

●二三五ページ

問 **◎「とりとめのない白」（3行目）とは、どういうことか。**

答 「僕」のとまどいを表現しており、色として明確な感じがなく、色抜けや脱色で色が無くなった状態の白、ということ。

問 **◎「歳月に洗われた見知らぬ人の骨のような白」（12行目）という表現には、どのような心情が込められているか。**

答 「僕」のとまどいや違和感や喪失感。

補 眼前の事態にまったく対処が出来ないような、困惑している「僕」の心理状態を表現している。ここで目にしている白は、「僕」にとってよそよそしい対象でしかない。

問 **「僕」がハワイ旅行のときの写真を確認しようとしたのはなぜか。**

答 ハワイの青い海が印象的だったこともあり、また、「僕」にとって大きな存在であったガールフレンドとの記念写真だったから。

●二三六ページ

問 **「まるでシベリアの氷原のような茫漠とした白い広野」（2行目）という比喩は、どのような効果を持つか。**

答 常夏のハワイの海とは対照的な「シベリアの氷原」という風景を用いた比喩表現によって、幸福な「僕」の過去の思い出が、わけもなく消し去られてしまったことへのむなしさを想起させる。

問 **「僕」が「ひとりぼっち」（5行目）だったのはなぜか。**

答 少し前にガールフレンドと喧嘩別れをしていたためにものすごく落ち込んでいて、パーティーに行く気にもなれなかったから。

問 **◎「くだらない。」（13行目）という「僕」の気持ちの原因は、どのようなものか。**

答 少し前にガールフレンドと喧嘩別れをしてしまったことに落ち込み、新しいミレニアムの到来を祝おうとしている世の中の雰囲気になじめないでいる。

●二三七ページ

問 **「僕」が別れたガールフレンドに電話をかけたのはなぜか。**

答 友人が誰もつかまらず、どうしても青のことを尋ねたかったからということもあるが、彼女と別れたことを後悔しているのかもしれず、まだ彼女に気持ちが残っていたから。

補 ハワイの写真をまだ持っていたことや、一九九九年の大晦日の夜なのにひとりでいることなどに着目し、その状況の背景として、彼女の存在が大きい点を確認したい。

問 彼女の部屋の様子から、「僕」はどのような気持ちになったものと考えられるか。

答 知らない男が電話に出たことや、人々がパーティーで集まっていて自分の状況とは正反対の賑やかさだったことなどから、彼女との間に出来た遠い距離を感じている。

問 ◉「半分喧嘩腰で言った。」（8行目）とあるが、なぜか。

答 少し前に喧嘩別れした「僕」から、ミレニアムを迎える楽しいパーティーの最中に水をさすような話をされ、腹が立ったから。

●二三八ページ

問 電話での彼女の口調から、「僕」に対する彼女のどのような気持ちが読み取れるか。

答 もう「僕」に興味はなく、電話も迷惑であるという、あからさまな拒絶の気持ち。

補 「僕」にとって近しい存在であったがゆえに、彼女なら気づくはずだ、あるいは、青の消滅について共有したいという思いがあったのかもしれない。「僕」と彼女との懸隔を確認したい。

問 「古い記録映画」（15行目）という例えには、どのような効果があるか。

答 第二次大戦中の記録映画であるならモノクロの映像であり、「僕」と遠く離れた風景であるという違和感を際だたせる効果。

●二三九ページ

問 「政治のことは私に聞かないで……ただの駅員です」（3行目）という駅員の言葉から、どんな組織が暗示されているか。

答 組織内の人間は歯車のひとつのように与えられた仕事だけをしている。また、「政治」という言葉も、上からの決定に完全に服従させられる体制がうかがわれる。

問 ◉駅員が「早口で言った」のは、なぜか。

答 中央集権的なシステムに従属している駅員は、職務以外のこと、特に政治に関わるようなことへの言及を避け、自分の感覚や思いで語りかけてくる「僕」を煩わしく感じ、なるべく相手にしたくないと思っているから。

補 機械の修理をしていて忙しいからという答え方だけでは物足りない。ここでは、「僕」が感じつつある孤独の深さについて、駅員の態度と対照させながら捉えておきたい。また、中央集権的な監視社会を想起すれば、職務以外のことは早く切り上げてしまいたい、という思いがあったからともいえるだろう。

問 駅員が「もっと偉い人に聞いてください。」（8行目）「中央コンピューターに聞いてください。」（9行目）と言っている点から、どんな社会であることがうかがえるか。

答 人間がロボットのように働かされていて、ＳＦ映画に出てくるような、コンピューターに支配された近未来社会。

補 かなり未来化した社会が想定されていることから、「青が消える」という事態もＳＦ的な設定と受け取れるだろうが、そこでの「僕」の切実な不安を通して、逆に現実感を伴った事態が読者に突きつけられる。

●二四〇ページ

問 「僕」が、青を失ったまま新しい世紀に入ると「すごくよくないことが起こる」（3行目）と感じているのはなぜか。

答 消失した青が見つからなくて焦っており、誰もそれを気に留めていないことで、不安

と疑念がますます大きくなっているから。

問 **「僕」はなぜ、総理大臣に電話したのか。**

答 駅員の言っていた「政治のこと」という言葉に何か根拠があるのではないかと思い、手がかりを求めようとしたから。

●二四一ページ

問 **「それが歴史なのですよ」（4行目）というのは、どういう意味か。**

答 形のあるものは必ず失われ、その代わりのものが新しく出来上がるという、そのサイクルのあり方が歴史なのだということ。

問 **「神様だってなくなります。」（6行目）とは、どういうことか。**

答 人々の信仰も変化していき、ある時代までさかんに信仰されていた神も、信仰されなくなると消え去ってしまうということ。

問 **「それが経済なのですよ」（10行目）というのは、どういう意味か。**

答 何かがなくなれば新しいものをまたひとつ作ればいいということ。

補 現代的な消費社会の様相を示している。

問 **◉「どこまでも通りを歩いた。」（11行目）とあるが、「僕」のどのような気持ちを表しているか。**

答 「僕」には二〇〇〇年の到来という「一生に一度」の区切りに意味が見いだせないほど青が消えたことに動揺し、しかもその喪失感を誰も受け止めてくれないために、「どこまでも」孤独な気持ちを抱えたまま解決の糸口がないことを象徴的に表している。

補 元恋人をはじめ、「僕」以外の人々が、やがて来る「新しいミレニアム」の瞬間を心待ちにしながらパーティーを開いたりしている描写があったことと対比してみたい。大半の人々は、世界から青が消えたことなど気にも留めず、さらに、国の代表である総理大臣の合成音声は青の消滅を仕方のないことだと回答したため、ますます「僕」は行き場のない孤独感を抱くのである。

問 **最後の「僕」のつぶやきが、太字（ゴシック体）で表記されているのはなぜか。**

答 青がないことに最後までこだわっているのは「僕が好きな色」だったということを強調するため。好きになる・好きでいるといった心情が、かけがえのない生をも示唆している。

補 「好き嫌いに関係なく歴史は進む」という総理大臣の言葉も参考にしてみると、ここでの「僕」のつぶやきが周囲と正反対の生き方を示唆している点に注意したい。

語句の研究

●二三四ページ

3 バッテリーがあがってしまったときみたいに。　ここから6行目にかけて、「…みたいに。」が二回、「…という風に。」が一回使われ、主人公の目の前から青が消えていくプロセスが、比喩表現を効果的に使って叙述されている。ここでの比喩は直喩（明喩）として捉えられる。

キー・ポイント　直喩表現の特質　直喩はその表現が比喩であることを明示する語句を伴っているが、そうした語句を伴わないものが隠喩（暗喩）だとされている。確かに、見た目の差異はそういうことになるが、比喩表現の成立のしかたから見ると、根本的な差異が認められる。「リンゴのほっぺ」という隠喩が了解されるためには「リンゴ」が赤い色をしているという知識が前提になる必要がある。つまり、隠喩においては、比喩の対象と例えるものとの類似性が前提になっていてはじめて効果を持つ。それに対して、「…のような」という直喩は、比喩の対象とそれを例えるものとの類似性が表現者の創意にゆだねられている。だか

ら、直喩表現はすぐれて創作性、独創性に富むことになる。作家独自の表現描写のセンスが直接的に表れるところだと言うことができよう。

●二三五ページ

1 もう青は存在しなかった。　初めは目がおかしくなったと思った「僕」だが、明るい部屋で、落ち着いた状態で、もう一度確認したとき、この現象は自分の精神的なものによるのではなく、外界の存在にかかわる変化だと捉えたわけである。

3 棍棒で殴られて記憶を失ってしまったような　ここでも独特な直喩表現が使用されている。暴力的な場面を想起してしまい、かなり強烈な印象があるが、それだけのショックを感じている状態を提示していることになる。「とりとめのない白」に変わってしまったという箇所も、記憶喪失のうつろなイメージを喚起して効果的である。

8 僕は青という色が昔から好きだったし　ここで青についての「僕」の心情が表現される。「昔から好きだった」ということを押さえておきたい。

キー・ポイント　**好きという心情**　好きな色という表現は最終部分でゴシック体によって強調されるが、ここでまずは表明されていることに注意する。好きだったものが消失してしまうということへの想像力を喚起させたい。

15 僕とガールフレンドが、水着姿で海岸に寝ころんでいる写真が沢山入っているはずだった。　クローゼットの青い衣服を確認した次に、青で思い浮かんだのが彼女とのハワイ旅行での記念写真だったというのは、ハワイの青が印象的だったこともちろん、そこに彼女がセットになっている点に注意したい。これらの写真は彼女の思い出として大切な物であったろう。

●二三六ページ

2 シベリアの氷原のような茫漠とした白い広野だった。　彼女と写した記念写真の中からも青はすべて消えている。しかし、この直喩表現を深読みすれば、このページ後半で明らかにされる彼女との関係、すなわち、現在は喧嘩別れしてしまっていることへの示唆、暗示と言えなくもない。しかし、写真を捨てるようなことをせず、青という色ですぐ思い出されるように、「僕」にとって彼女との思い出は重要な記憶である。

5 僕はひとりぼっちだった。　ここでまた青が消える直前の時間に戻ってゆく。「僕」が一九九九年の大晦日の夜に、なぜひとり部屋でアイロンかけなどしていたのか。その事情が語られている。「世界中の人間はひとり残らずどこかのパーティーにでかけていた」という周囲の祝祭的なムードは、「僕」の孤独感をより際立たせている。もちろんその原因は彼女との喧嘩別れにあった。「ものすごく落ち込んでいた」とあるように、その時点で既に周囲からの疎外感、違和感に埋没している状況が読み取れる。その心的状況下で青は消えていったのである。つまり、「僕」にとって失われたものは、彼女の存在と青である。ここでは、彼女と青の近接性を押さえておきたい。

●二三七ページ

2 僕のガールフレンド　別れたガールフレンドと言いながら、ここでは「僕の」と二度も反復している。喧嘩別れしたとは言いつつ、やはり心のどこかで彼女とのつながりを求めているのではなかろうか。確かに恋人という表現はないのだが、一緒にハワイ旅行までした関係は、「僕」の心身に忘れがたい記憶を形成していたはずである。

キー・ポイント　**僕のガールフレンドの部屋**

では賑やかなパーティーが繰り広げられているようだった。　電話先の彼女の部屋の様子であるが、これは「僕」に強烈な印象を残したはずである。「僕」がひとりぼっちでいなければならなくなった原因は彼女との喧嘩にあったわけであるが、当の彼女は、「僕」とはもう別れて無関係になったと考えていることがここではっきりしたことになる。電話に出た見知らぬ男、賑やかに盛り上がっているパーティーの様子。それだけで、「僕」の現在の状態とはまるで正反対である。「僕」は落ち込んでいるのに、彼女の方はもう気持ちの整理をとっくにつけていると「僕」には痛切に感じられたはずだ。彼女の第一声の「半分喧嘩腰」は、「僕」にとっては自分の孤独を否応無しに噛みしめさせるものであっただろう。

16 今日は二十世紀最後の夜なのよ。　彼女は「僕」の周囲の人々を代表する存在でもあるだろう。新しい世紀を迎えることに夢中になっている人々の気持ちを、彼女の台詞はまさしく代表している。なぜこんな時に楽しもうとしないのか、今楽しまない者は馬鹿だと言わんばかりの態度である。別の面では、「僕」へのかつての気持ちなど自分には少しも残っていないということを「僕」に表明している台詞でもある。そして、そのことを「僕」は沈黙したまま受け入れざるを得ない。ここで、彼女と青の近接性が断たれていくことに注意したい。

●二三八ページ

9 ブルーラインの地下鉄　現在の横浜市営地下鉄に同名（平成二十年より使用）の路線があるが、ここではフィクションとして設定されている。東京の地下鉄の路線系統は実際、迷路のように錯綜しているが、ここでは色分けして分かりやすくするという都市計画が想定されているようである。ここから極めて合理的に構成された近未来都市を想像することも可能である。

15 スターリングラードの冬季攻防戦　一九四一年六月に始まったドイツ軍のソ連侵攻は十月のモスクワ攻防戦から一転し、十二月にはソ連の反抗が開始された。翌四二年夏にスターリングラードの半分を占領したドイツ軍は、冬に入ってからのソ連軍の反撃により二か月間の苛酷な市街戦の結果降伏する。この攻防戦の勝利をきっかけに、ソ連の攻撃は波に乗り、ベルリン総攻撃まで続いていくことになった。「僕」がブルーライン地下鉄のブルーがすべて白一色に変わっているのを見たときに、この独ソの熾烈な冬季市街戦の記録映画を思い出すというのも、「僕」の心情の殺伐としたありようをイメージさせる。かなり荒涼とした心象を喚起する比喩である。また、専制政治や全体主義体制を連想させる表現でもある。

●二三九ページ

3 政治のこと　地下鉄の駅員は確かに青が消失したことに気づいているともとれるし、青という言葉を何かと勘違いして動揺しているともとれる。いずれにせよ、ここで駅員は政治のことは私に聞くなとばかり言うが、近未来社会の体制を想像させる言葉である。「中央コンピューターに聞いてください。」というのも同様に、非人間化した社会体制を推測させる。コンピューターの返事からもうかがうことができるように、合理的でないものは認められない社会であり、全体主義的な専制政治が臭う社会ということになろう。

10 私はただ言われたとおりに働いているだけです。　中央集権的なシステムに従属し監視され、上からの決定に完全に服従させられ

ていることがうかがわれる。ただ、そうした体制に従順であれば、ある意味では自分の身分も保障されるのである。目の前の現実について考えようとしない駅員の態度は、青が消失したことにこだわり続ける「僕」と対照的であるといえるだろう。

16 僕の不安はだんだん高まってきた。　もう時計は十一時四十五分を指しており、失われた青の行方と、その理由を求めても得られない「僕」は、いよいよ不安を募らせていく。しかし、「僕」のこの焦燥感は、自分ひとりがことの重大性に気づいており、他の誰もが新世紀のお祝いで何も気づかないということにある。「僕」の孤独感が非常に強まっているのである。

●二四〇ページ

6 コンピューター・システム　地下鉄の駅員が言った「中央コンピューター」のことかどうか不明だが、総理大臣が直接回答してくれるかのようなコンピューターソフトが開発され、公衆電話からも通話可能であるという設定である。ここもＳＦ的な近未来社会が想定されるところである。

10 白鳥は哀しからずや…　若山牧水作の有名な短歌である。教科書二六九ページ参照。総理大臣としてのコンピューターは「青が消えた」という「僕」の訴えについて連想した短歌を話しているのだろうが、ここでの「僕」の立場はこの短歌の「白鳥」に例えることもできよう。自分の周囲の雰囲気などにひとりだけ染まらず、人々と一緒に新世紀を祝う気持ちになれない「僕」の孤立した状況を暗示しているとも読み取れる。

●二四一ページ

4 それが歴史なのですよ　コンピューターの回答は実に単純な答えである。事物が変化し、次々と消滅していくことの果てしのない反復が歴史なのだというのは、まずは一種の進歩史観と言えるだろう。

5 石油だってなくなります。ウラニウムだってなくなります。　石油はもちろん重油を指すだろうし、ウラニウムは原子力の資源として述べていよう。つまり、エネルギー資源の枯渇の問題を指摘しているわけである。もしそれらがなくなれば、当然他の代替エネルギーの開発が課題となる。

5 コミュニズム　共産主義。私有財産の否定と共有財産制の実現によって貧富の差をなくし、平等な社会を実現しようとする思想・運動。マルクス、エンゲルスによって体系化された。一九一七年、ロシアで起こった十月革命でソビエト社会主義共和国連邦が成立。世界初の共産主義国家であった。しかし、一九九一年十二月に崩壊。ちなみに本作品が発表されたのは一九九二年である。超大国ソビエトの政権が崩壊したことを受けて、このように表現されていると考えられる。

6 ジョン・レノン　元ビートルズのメンバーで、グループ解散後は旺盛にソロ活動をしていた。平和運動などにも積極的に関わり、メッセージ性の強い歌詞で数々のヒット曲を作っていたが、一九八〇年にニューヨークの路上で凶弾に倒れた。

6 神様だってなくなります。　十九世紀末のドイツの哲学者フリードリヒ・ニーチェの著作「ツァラトゥストラはこう言った」の冒頭部に「神は死んだ」という言葉がある。ニーチェの最も有名な言葉である。

10 それが経済なのですよ　ある物が次々となくなっていくことそれ自体が歴史だと言い、次に一つなくなったら、また新しく一つ作ればいいと言う。そのサイクルを消費と生産と捉えれば、それこそが経済だと

いうのである。大量消費、大量生産の時代を極端に語っていることになろう。

キー・ポイント　それは僕が好きな色だったのだ。　最後に小声でつぶやく僕の言葉は、「僕の好きな色」という表明である。生産と消費のサイクルに否応なく巻き込まれ、先を争って生きているような人々と正反対の生き方を示唆する言葉が「好き」という言葉である。あらゆるものの進化や、時間自体の停止を含意する「好き」という心情に注意したい。何物かを好きでいる状態は、どういう心理と思考と生き方を導き出すだろうか。日々失われていく物があまりにも多い現代、その失った物にはいったいどういう意味があったのだろうか。今一度振り返って考えてみたいところである。孤立した状況の中で、それでも自分の「好き」をみつめる眼差し。その時に立ち現れてくるものは、かけがえのない「個」としての自分であるといえるだろう。

注意する語句

（＊で用例を示した）

名残惜しい…過ぎ去る物事や人物との別れが辛く、心残りである。
＊行く春が名残惜しい。

とりとめのない…まとまりがない。はっきりしない。
＊とりとめのない話を続ける。

茫漠…広くてとりとめのないさま。ぼうっとしてはっきりしないさま。
＊どこまで行っても茫漠とした原野が続いているだけだった。

喧嘩腰…喧嘩をしかけようとするような居丈高な態度。
＊間違いを指摘すると、相手は喧嘩腰で反論してきた。

辛気臭い…思うに任せず、くさくさした気分である。気がめいって、どうにもやりきれない気分である。
＊ひたすら荷物整理ばかりで、なんと辛気臭い仕事だろう。

目一杯…はかりの目盛がいっぱいであること。転じて、最高限度にいたっているさま。
＊目一杯、仕事に励む。

ロクでもない…何の値打ちもなく、無意味である。くだらない。
＊ロクでもない話を信じてはいけない。

水をさす…うまくいっているのに、邪魔をして不調にする。
＊楽しんでいるのに、詰まらない話で水をさすことはないだろう。

攻防戦…攻めることと防ぐこと。攻撃と防御。
＊必死の攻防戦を繰り広げる。

鑑賞

なぜ青が消えたのか。アイロンをかけている最中に、という極めて日常的な生活の一場面で起こった唐突な出来事に面食らわない読者は少ないはずである。どうして青なのか、なぜ「僕」はアイロンかけをしていたのか。そもそもいったいどういうことが起こっているのか。そういった疑義を冒頭部分から喚起する小説である。しかも、その青の消えていくありさまが、くどいほど直喩を重ねる形で描写されていく。その描写は、青という色が目の前で消えていくという、ほとんどありえない、常識的には想定できない事態を目撃した「僕」にとっては必然的な描写だったのだろう。そのあまりに個人的すぎる体験に対して、「僕」ははじめ自分の方がおかしくなったと判断する。自分の目がどうかしてしまったのだろうと、あくまでも自分側に問題があると感じたのである。青色だけが視覚に捉えられない病にでも罹ったかと思ったりもするが、それも落ち着きを取り戻して再確認することによって否定される。「僕」の外部の存在としてある青が消失してしまったという事態だと、捉え直しているのである。ここから、「僕」による青の捜索が始まっていくことになる。

このように開始される「青が消える」は、なぜ青が消えるのかという疑問自体は、読み進めるに従ってどんどん先送りになっていく。それは、「僕」の行動を読むうちに、「僕」同様、読者もまた青の消滅を受け入れざるを得ない状況に追い込まれていくからだ。青の消滅について尋ね回る「僕」に向かって、他の登場人物は「僕」の疑問を頭から無視する態度に出るからでもある。誰も「僕」に向かってそれはおかしいといったようなことは言わないで、青ぐらい消えたっていいではないか、二〇〇〇年の新ミレニアムを迎えるほうが大事に決まっているとか、そんなことを自分に尋ねないでくれ、自分の責任ではないんだ、というような反応しかしない。そこから逆に、「僕」にとって青とはいったいどんな意味があったのか、青とは何なのか、という疑問が自然に浮かんでくるのである。

青の寓意性を読む準備はもう一つの契機から進められている。この作品ははじめ、現実の時間と空間が自然に叙述されている小説として読めるが、屋外で青を捜索しようと地下鉄の駅へ行く場面で、東京という現実の地名とともに「ブルーライン」という架空の路線が提示される。ここで読者は一気にＳＦ的な近未来の東京を想定せざるを得なくなる。さらにそのＳＦ小説のフレームの中に「中央コンピューター」とか、総理大臣のかわりに電話に出るコンピューター・システムなど、確かに近未来を想像させることがらが次々に収められていくことによって、この近未来の東京が、どのような社会体制、政治体制になっているかということについても、読者は想像せずにはいられなくなる。こうした読みの中で、「僕」がこだわり続ける青が徐々に特権化してくるのである。

すべてのものが消費され、代わりのものがすぐに生産される社会システム。そのサイクルを唯一の時間と認識している人間たちにとっては、一つがなくなれば、別の一つを新しく作れば良いだけのことである。新しいもの、向こうからやってくるものを待ち望み、いつでも未来ばかりに目を向けていることがよしとされる社会にあっては、昔のもの、懐かしい感情を刺激するもの、いま、

ここでの事態を見つめ続けようとすることは、自然に否定されてしまうだろう。そうした社会にあって「僕」の心情と行為は極めて特殊である。

誰にも理解されない想いを抱いてひとり小声で「僕の好きな色だったのだ。」とつぶやくのは、過去から現在の自分を支えてくれているもの、些細ではあるが自分自身をまさしく自分であると確認することを可能にしてくれているものを失うまいとする孤立無援な思想でもある。

「僕」の心情と行為を丹念に追跡していくことは、すなわち、青の寓意性を象っていくことになる。そのとき、青は「僕」にとっての何かに限定されるものではない。読者自身にとって、忘れられないもの、好きなもの、いつまでもそのままにいとおしく、共にありたいと願っているものとして読み取られるはずである。

参考

・「村上春樹全作品 1990～2000 ①短編集Ⅰ」（解題）　講談社　平十四（著者自身による解題）

短い短編小説『青が消える（Losing Blue）』は、１９９２年にスペインのセビリアで開催された万国博「EXPO’92」を特集する雑誌のために書かれたものである。この雑誌はかなり分厚いもので、英「インディペンデント」、仏「ル・モンド」、伊「ラ・レプーブリカ」、西「エル・パイス」の各新聞が「新聞別冊（サプルメント）」というかたちで共同でつくり、それぞれの言語で発行した。

その雑誌のために、ミレニアムの大晦日を舞台にした短編小説を書いてほしいという依頼を受けたのが１９９１年のことで、「なんでまた今ごろそんなものを？」といささか不思議に思ったのだが、この万国博のテーマのひとつが「ミレニアムに向けて」というもので、それで主催者は世界各国の作家、五人か六人に同じテーマで小説を依頼したわけだ。僕は依頼を受けて小説を書くことはほとんどないのだけど、テーマもなかなか面白かったし、短いものだったし、仕事の合間でちょうど時間が空いていたこともあり、「ちょっとやってみよう」という気になって引き受けたのだろう。だいたいそのように記憶している。八年後の世界の話なので、多少近未来っぽい感じのものになった。

・「村上春樹スタディーズ２０００―２００４」（「個人化の時代における寛容のかたち―村上春樹と他者への態度―」）　松浦雄介　若草書房　平十五

最初期の『風の歌を聴け』および『１９７３年のピンボール』において主人公を私的世界にとどまらせた続けたのは、社会の変化の速度だった。急速な変化がもたらす喪失に固執することは苦痛をもたらすし、かといって変化を克服することもできない。このジレンマが主人公を受動的にさせた理由だった。

三作目の『羊をめぐる冒険』(1982) 以降の作品になると、冒険小説的な構成が強まり、それとともに、主人公の世界認識も変わってくる。主人公は相変わらず受動的であるが、しかしその理由が以前とは違ってくる。『羊』以降の小説において重要なのは、速度よりも複雑性である。出来事は複雑な因果の網の目のなかで生起する。だからそれはつねに予測不可能なかたちで主人公の前に立ち現れる。一般に、対象から距離をとることは防衛メカニズムの一種であるが、『風』や『ピンボール』において、その防衛は急速な変化が強いる喪失の苦痛にたいするものであったのにたいし、『羊』以降の作品においては、予測不可能なかたちで生起する出来事の衝撃にたいするものである。たとえば短編「蛍」(1983) では、主人公の親友が動機もなく遺書もなく自殺する。主人公はこの出来事に直面して死について内省的になるが、しかし自殺の理由を追及しようとはしない。「深刻に考えるには世界はあまりに不確実だし、たぶんその結果としてまわりの人間に何かを押しつけてしまうことになると思う」からである。複雑な因果の網の目のなかで、出来事は予測不可能なかたちで生じ、理解不可能な部分

を残す。その原因をどこに還元したとしても、その理解は多かれ少なかれ恣意的にならざるをえない。そしていったん起こった出来事も、複雑な因果の網の目を辿りながら、その意味を変えてゆく。だから、ほんのわずかな選択の違いが、後になって大きな違いとなって現れる。このような出来事の不確定性のために、認識は、つねに遅れて、そして後悔とともにやってくる。「気づくべきだったのだ。まず最初に気づくべきだったのだ」。

　この不確定性を生きる主体が出来事の当事者となるとき、予測不可能で理解不可能なのは自己自身である。主体は生起する原因と結果の複雑な流れに翻弄され、けっして行為をみずから選択する存在になることができない。いいかえれば、主体は自己原因となることができない。だから主人公は探求をつうじて、混沌として一貫性を欠いたように見える世界に隠れた因果的つながりを見出し、そのつながりのなかに自らを位置づけようとする。

　このように、私的世界にとどまることは、社会的世界における人間関係の葛藤を避けるためだけではない。むしろ、出来事を適当に理解したことにして片づけ、早々と社会適応に向かうよりも、逆に社会から距離をとり、出来事の複雑な因果の絡まりを掘りさげようとするためでもある。

深い学びのために
学習のポイントの解答例

1　場面展開を区切って、「僕」の行為をまとめてみよう。

【答】　指導資料の「構成」参照。

▼ポイント▲ 自室内でアイロンかけをしていた時に青が消えた。その後、「僕」のとった行為を、⑴自室内で自ら青を確認しようとした。⑵自室内から外部の他者へ連絡をとって青を確認しようとした。⑶自室から外へ出て青を確認しようとし、地下鉄の駅員に問いただした。⑷公衆電話から総理大臣が回答するコンピューター・システムへアクセスし、青の消滅について問いただした。以上の4段階を読み取っていく。

2　「僕」の心情が変化していく過程を考えてみよう。

【答】　指導資料の「構成」参照。

▼ポイント▲ 一九九九年の大晦日の夜に、「僕」はなぜひとりぼっちで自室でアイロンかけをしていなければならなかったのか。青が消える以前からの「僕」の心情は、ガールフレンドと喧嘩別れをしたことから落ち込んでいる状態であった。まず、小説の内容を時系列にそって捉え直してから心情の把握に入っていくとよい。特に、彼女との電話のやりとりの前後は注意深く読んでいく必要がある。落ち込んでいる状態の中で、驚きや不可解さがあり、彼女の受け答えに対しては沈黙したままだが、さらなる落ち込みがあり、あきらめもあるだろう。駅員との会話では、不審を抱き、徐々に不安が大きくなっていく。総理大臣としてのコンピューターの回答によってあきらめの気持ちが強くなるが、最後のつぶやきのところではどのような心情になっているか、考えさせたい。

3　「総理大臣」の言う「それが歴史なのですよ」（二四一・4）、「それが経済なのですよ」（二四一・10）の意味を話し合ってみよう。

【答】　物事が新しくなる裏で多くのものが捨てられ、忘れられていくが、それが人間にどういうものの見方を植えつけるだろうか。進歩発展が歴史であり、経済の原動力というなら、人間はただ前を見て進むだけの動物である。「使い捨ての時代」と言われた高度経済成長期や、バブル経済全盛期の日本社会などの例から考えさせてもよい。人間は、進歩発展だけを優先させて生きてはいけないことに気づかせたい。

ある物が次々となくなっていくことそれ自体が歴史だと言い、次に一つなくなったら、また新しく一つ作ればいいと言う。そのサイクルを消費と生産と捉えれば、それこそが経済だというのである。大量消費、大量生産の時代を極端に語っていることになろう。

4　「僕」にとって「青」とはどういうものだったのか、「でも青がないんだ、と僕は小さな声で言った。そしてそれは

僕が好きな色だったのだ。」（二四一・15）とある太字体の箇所を参考にして、考えてみよう。

【答】　「僕」が自室で青を確認する際に、気に入っていた衣服類の青を「昔から好きだった」と言っているが、次に青として頭に浮かんだのは、ガールフレンドとのハワイ旅行の写真だった。そして、第一段から第二段にかけて、喧嘩別れしたガールフレンドが登場する。ここでは、「僕」にとって、青と彼女とは互いを連想させる関係にあり、ガールフレンドへの気持ちが青として象徴されているようにも思われる。しかし、彼女の冷たい対応からしかたなく外へ青を探しに行ってからは、もう青と彼女との関連は切れていると思われる。総理大臣としてのコンピューターの回答を聞き、遂に新世紀に入ったところでは、「僕」が「僕」自身でいるために必要なものとして、青はさらに象徴化されている。すなわち、青は、生産され消費されてゆく諸々の事物や流行などとは同列に扱えない、「僕」にしか分からない大切なものの象徴であると考えられる。

言葉と表現の解答例

1　「青が消えた」（二三四・1）ことを、「ちょうど機械の…という風に」（二三四・2～6）のように、三通りの比喩で表現してみよう。

【答】　冒頭には、「だんだんかすんで薄くなっていって、それからすっかり消えてしまった」とある。小説の描写に即すならば、このイメージに合うような比喩表現を、色彩以外を例にして考えるのが好ましい。

例1：公園の砂場に作った池の水が、やがて染み込んで乾いていくみたいに。

例2：夏の夜、急に停電でクーラーが止まってしまった後に思い出す涼しさのように。

例3：まるで、九月の台風の後に気付けば聞こえなくなった蟬の鳴き声みたいに。

2　「水をさす」（二三八・6）のように「水」を用いた慣用的用法を集めてみよう。

【答】

- 「水をあける」…競っている者の間に差ができる（差がつく）こと。
- 「水を打ったよう」…静まりかえっている様子。
- 「水を得た魚のよう」…それまで元気のなかったものが、生き生きとしているさま。
- 「水を掛ける（＝水をさす）」…物事がうまく運んでいるのを邪魔して、勢いをそぐこと。
- 「水を向ける」…相手の関心をある方向へ向けるように誘いかけること。

3　「攻防戦」（二三八・16）のように、「…戦」となる三字熟

語・二字熟語を集めてみよう。

【答】
（三字熟語の例）接近戦・宣伝戦・山岳戦・選挙戦・空中戦・地上戦・戦車戦・心理戦・投手戦・乱打戦など。
（二字熟語の例）熱戦・力戦・苦戦・混戦・善戦・奮戦・応戦・開戦・会戦・合戦・交戦・激戦など。

言語活動の解答例

１　この小説の設定が１９９９年の大晦日であることには、どのような意味があるか、考えてみよう。

【答】　ノストラダムスの大予言や、二〇〇〇年問題など、同時代の明るいだけではないパニックを予兆するような雰囲気を調べたうえで考えてもらいたい。執筆時はバブル経済が崩壊しつつある時期であり、平成七（一九九五）年には阪神淡路大震災や地下鉄サリン事件が起こることになる。しかし多くの人々は、日本の経済的成長がまだ続くと信じていた時代だったのかもしれない。

毎年やってくる大晦日でも、翌日からの正月や新年を迎えることにほとんどの人は夢中になる。まして、「１９９９年の大晦日」ということなら、一〇〇〇年に一回のこのときを経験するのは歴史的なことであり、それだけで大きなイベントと言える。つまり、人々が皆いっせいに未来に目を向けるときであり、場面をこうしたときに設定することによって、ひとりで自室にこもっている「僕」の孤立感と特殊なものの見方が自然に強調される。「僕」ひとりだけが何か大事なことに気づき、取り残されていて、そうした孤立感を際立たせるという意味で効果的である。

２　この小説における「青」と「ミレニアム」の関係を、ほかの例に置き換えて、考えてみよう。

【答】　他人にとっては些末なことであっても自分にとっては譲れない大切な何か。そうしたものが顧みられない切なさについて、誰しも一度は経験があることをまずは共有したい。その上で、少数者の意見が多数者の大きな声によって掻き消されていくような社会の構造へと話題を拡げたり、報道における印象操作などの問題に思い至ることもできるのではないか。個人の嗜好をめぐる不条理なユーモアやペーソスへと深めることもできるが、本作が提示する、社会全体の中での孤独のメカニズムが摑みとれるように促していきたい。

作中の総理大臣の音声は「歴史」と「経済」を等号で結ぶが、こうした経済至上主義的な価値観において、どのような少数の声が掻き消されていったのかは、二十一世紀の現代社会においても多くの事例があるはずである。平成二十一（二〇〇九）年、作者のエルサレム賞受賞式でのスピーチが話題になったが、「壁と卵」の比喩も「社会」や「個人」のあり方を考えるうえで示唆を与えるものであるといえよう。

（石川則夫・山岡正和）